

---

# 死神くんと米田さん

たすく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死神くんと米田さん

### 【Zコード】

Z7816Y

### 【作者名】

たすべ

### 【あらすじ】

自サイトより転載。

2000年ぐらいに書いたものらしい…クロス物で、死神くんが大  
神さんの前にやつてくるお話。

ここは日本。帝都・東京。新宿・大帝国劇場。時は夜。

その大帝国劇場の一室で眠りについている男がいた。正式に大帝国劇場の支配人なつた大神一郎その人である。

大神は妙な気配で目を覚ました。

黒之巣会の天海とも違う。降魔を操った叉丹とも違う。神皇を蘇らせた京極とも違う。怪人たちともデルニエとも違う。枕元に立てかけてあつた神刀滅却に思わず手をかけた。もちろん、ベットの反対側にいるであろう人物には見えてないはずだ。気配は動いてなかつた。

(・・・・・やるか。)

大神は起きると同時に神刀滅却を抜いた。

一閃。

斬つた。いや、斬つたはずだつた。

大神の前には目を疑つた。三尺に満たないとも思われる小柄な男が宙に浮いている。大神に斬られた後は無かつた。

「びっくりしたな、いきなり斬りかかるとは思わなかつたよ」

小柄の男はそう言う。

大神は思わず叫んだ。

「何ヤツ!?

「叫ばなくても聞こえるよ。そういうれば自己紹介がまだだつたね。俺はこういう者さ」

男は懐から一枚の紙を大神に差し出した。

大神はその紙を警戒しながら受け取り、罷がないか調べてから内容を確認する。そこにはこう書かれていた。

大神は目を疑つた。

「死神だと！？」

「俺は死神だよ」

「何のようだ！？」

大神は神刀滅却に靈力を込めた。

「死神の仕事は、わかつてゐるはずだぜ？」 大神さん

「俺の名前を！」

「大神さん、言つておくが靈力をいくら使おうが、神刀滅却で斬ろうが、俺は殺せないぞ」

「く・・・」

「本当なら言つちゃいけないんだが、身寄りが無いみたいなんですね。息子的存在である大神さんの前に姿を現したのです」

「何が言いたい！？」

「帝国陸軍中将及び元・大帝国劇場支配人でもある米田一基。彼の寿命はあと三日」

「何だと！ 貴様！！」

大神は怒りが爆発しそうになるが、無理やり押させた。ここで怒つて冷静さを欠ければどうなるかわからない。

「これも運命だからな」

「運命だと！」

「伝えたぜ、じゃあな」

死神は消えた。

消えたと同時に緊急連絡が入った。米田が倒れて病院に運ばれたと言ふ連絡が。

「まさか・・・あの死神の言つとおりに・・・  
大神は病院に急いだ。

「いややあ～、すまねえなあ」

病室のベットで米田は言った。

「なーに、転んじまつてな」

いつもの米田がいた。駆けつけていた花組一同、安堵した。

しかし、大神は死神の言葉が気になっていた。

『米田一基。彼の寿命はあと三日。』

話があると言つて、大神だけ病室に残つた。

「大神、話つてなんだ？」

「支配人・・・」

「支配人は大神、お前だぞ」

「では、米田中将で」

「相変わらず堅苦しいヤツだな

「すみません」

「話は戻るが・・・俺に話つていうのは？」

「米田中将、死神にお会いしましたか？」

「・・・！ おめえ、それを何処で・・・

「やはり・・・」

大神は顔をしかめた。

そのとき、上から声がした。

「俺が言つたのさ」

「死神か！」

ほえる大神。

「ここは病院だよ。大声はいけないんだろう？」

「く・・・」

「死神さんよお・・・何故、コイツに言つた？」

「米田さんの息子みたいなもんだからな」

「俺はよお・・・誰にも知らせずに逝くつもりだつたんだけどな」

米田は窓から星空を見上げながら言う。

「米田中将！」

「大神。これからはお前達若い者の時代だ。俺のような老骨は黙つて去つていった方が良い様な気がしてな」

「何を言つんですか！？」

「死神よ。三日とか言わねえでさ。今、あの世とやらに連れて行ってくれねえか？」

「ほう。今までいろんなヤツを見てきたけど、米田さんみたいなヤツは珍しいな」

「なんて事を言つんですか！？」死神など俺が・・・！」

神刀滅却を抜こうとする大神。しかし、それを米田が制止した。

「大神、落ち着け。お前の気持ちは良くわかる。これも運命かも知れねえなあ・・・・・」

「しかし・・・！」

「大神、お前は帰れ

「！」

「俺の死に様をお前に見せたくない」

大神は思わず涙がこぼれた。

「米田中将・・・・」

「泣くヤツがあるか・・・・・」

「すみません。しかし、自分は・・・・・」

「相変わらずだよ、おめえさんはよ」

大神は涙を拭くと敬礼をする。米田もそれを見て敬礼をしたのだ

つた。

三日後、米田一墓逝去の知らせが大帝国劇場に届いた。

「やれやれ、面倒な仕事だつたな」

ぺろりとペンを舐めて、手帳に仕事完了の印を書き込む死神。その死神の後にふわふわ浮いている米田がいた。

「死神さんよ。あいつらが泣いている所を見たくねえ。手つ取り早く、一馬や山崎、あやめ君の所に連れて行ってくんねえか?」

「わかった」

死神はそう言ひと米田とともに天に向かつて飛んでいった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7816y/>

---

死神くんと米田さん

2011年11月23日11時46分発行